

南方転進

戦塵の回顧録より

千葉卓 矢島 博

陽性に想える南方への期待もあった我々は、上海近郊の呉淞の波止場へ集結した。巨大な船がひしめいていたが狭いので何隻かずつ順番に乗船しなければならぬ。船と人、大砲に車輛、馬や食料で混雑の一語につきる。私達の乗船する「天津山丸」は新船であり、いかにも心強いが、大正時代にでも造ったオンボロ船が多く、まずは幸先がいいと思う。自分らの船こそは絶対沈まないと心に決めて、命令とともに乗船をした。誘導者の指図で船艙が二段に区切られていて、下は馬と軍用犬に隊貨の山で、その中央が空気抜きと明かり取りのため大きく四角に開けられ、中段のその周囲が人間の住む所となっている。そこはさらに三段に仕切られていて兵隊の住居となっている。天井は低く、

正座すれば頭をぶつける。さらに仰向けで寝るだけのスペースはもちろん無いので、横になって曲げた足を、人の足と絡み合わせて寝るのである。

部下の兵をもっていない下士官などは初めから甲板に陣どっていた。そんな話は全くの作り話であると驚け取っていたのであるが、「コリャ本当だワイ」と驚いたり感心したりである。それでも新船らしく救命胴衣は新品なので枕や座布団として使用、これは快適である。

昭和十九年四月十八日、夜が明けると豆粒を多数散らしたような島々があつて、これが舟山列島だそうだ。この辺は水深も浅くまだ安全地域であるが、わが船団と入れ替えに小型の船が入って来て、その横腹には不発の魚雷を抱えていた。航海は危険だなあと思わずにはいられなかつた。

やがて北方の水平線から現われた船団があつた。これは北支は開封から来て釜山より出航した雪兵団であつて、わが樞兵団と合流、それぞれ五隻ずつ、それに台湾のキールンまで同行する小型船二隻を加えて、これ

を海軍少将の指揮する砲艦「白鷹」と駆逐艦二隻、その他の他は戦力の薄い駆潜艇や貨物船改造の掃海艇(？)であったが、船団演習を繰り返しながらいつしか出発していた。そしてその航行は敵艦の魚雷攻撃を避けるため、船団を組みながらの蛇行運行であった。

「天津山丸」はデッキを境として、前から第一、二船艙となっている。私たちの位置は第二船艙であり、前述のようなすし詰めであるうえに船底より上がる馬匹の吐く息と合わせて、吸う空気は死臭さえする。

南下につれ甲板の熱し方と比例してさらにこの傾向はひどくなり、上衣を脱ぎ、シャツもボタンを外すようになる。船艙の四角には、小田原提灯状の太くて長い布製の筒がぶら下がっており、休まず風を送っているのだが、サッパリ効き目がない。船の動力であるピストンエンジンと、この換気のための送風機の音、加えて火事場のような兵の話し声、「静粛に」との再三の注意も明け方近くの二、三時間を除いては守られない。

船食は過剰すぎる人員のため、時間も各隊マチマチ

で決まってガンダ飯である。これに中身の少ない汁をぶっかけて腹に流し込む。そのほかに沢庵二切れか、小さな梅干一つほどであった。それでも一人の欠食者をも出さなかったのは日ごろの訓練の賜物であろう。

一番不足したのは飲料水であって、これほど困ったことはない。乗船直後の回報では、一日一人当たり水筒一本と定められていたのであるが、飯盒に軽く一杯が五人分の割当てとなったのである。そのうち本船は戦時規格船で能力に劣り、速力が出ないため僚船に大変迷惑をかけているとのこと、石炭をフルに炊くために、兵隊の中からボイラーの経験者と、また船底から石炭を運搬するための要員を募集した。この勤務につけば水一片の特配があるため、初年兵などは進んで志願した。

重なる悪条件は逆に緊張心を解きほぐし、二、三日を過ぎるや船中はぐったりとして、昼夜渾然となり、薄暗い電灯の明かりの下でウツラウツラするようになり、船中はいくらか静かになってきた。

この息苦しさを逃れて甲板に出る。船首には船砲隊

の高射砲、船尾には海軍砲が一門据え付けてあるほか、対潜射撃のための各種の大砲や、対空射撃のための機関銃がビッシリと据え付けてある。また前方の右舷には木造の大小使所が舷側に張り出されてあったが、乗船人員の割にはその数が少なく、昼夜を分かつたところには長い行列が続いていた。飲料水と同様、大変に困ったことであった。

台湾に近づくころから日の丸の双弁機が護衛に加わった。船砲隊はこれを目標にして射撃訓練をしている。護衛艦が時々スーッと離れていったと思うと、水平線の近くで爆雷攻撃が始まる。これを船内で聞いていると、ドカン、シューッという音波が伝わってきて気持ちの悪いこと一通りでない。非常訓練もあつたはずだがこの雑踏では大したことはできなかったであろう。左舷の島台湾は長く、一昼夜以上も通過に要したかもしれないが、後尾をつけていた二船は、いつしか戦列を離れて見えなくなった。いよいよ台湾は終わりである。これで日本とも本当にオサラバである。

船団は魔のバシー海峡へと進む。爆雷攻撃と友軍機

の急降下爆撃にも慣れて一抹の不安はあつたとしてもまさに大船に乗った気持ちでいた。

四月二十六日、暗夜の午前一時ごろ突如として後方に閃光がして、わが乗船のマストを明瞭に照らすや、グワンという大爆発がした。一隻置いた後にいた「第一吉田丸」が轟沈したのである。船団は速力いっぱいにして逃げ出し、船はガタガタと揺れる。後で判ったが、わが歩兵第二百連隊（主として甲府連隊）や野砲兵第三十二連隊の第二大隊などがこの難を受け、乗員三五〇〇人中、八〇〇人を残して、連隊長以下が軍旗ともども散華したのであつた。

悪夢の一夜は明けた。左舷には比島の山々が見え、海岸には椰子などの熱帯樹が近くに望めた。このあたりでビールが二人に一本の割で配給されたが「咽の目が開く」とはこのことをいうのであろう。敵潜を避けるの極度の接岸航行。何度かの警戒警報に肝を冷やす。船団は左に大きく旋回して湾内へと入る。あれがパタアン（山々）である。甲板は人で鈴なりになった。張り巡らされた防潜網を避けて四月二十八日「マニラ」へ

入港した。

この港も狭いので数隻ずつ交代で接岸して燃料補給やら給水をする。この間、検疫の名目で上陸が許されたので、本当に久し振りで土の、いやコンクリートの上に立つことができた。水道を使い交代で汗と埃を流した。これが天国でなくて何であろう。馬も上陸させ、運動させていたが、その一頭がクレーンから落ちて無惨な死を遂げた。先の航海を暗示しているようで嫌な気がする。

ともあれ水はふんだんに飲めるし、食事の際にはバナナも渡された。手足を精いっぱい伸ばしたり、柵の中ではあったが埠頭を歩き回ったりで満足至極である。これこそ「マニラの休日」というべきであろう。

暑い夜はコンクリートに毛布を敷いて寝たが、後半夜ともなれば涼しくて心地良く熟睡することができた。この天国にいる生活も二日目にはいやいやながら元の船へと帰らなければならなかった。

再び蒸し風呂の生活が始まったが、改めてマニラ市街を望めば樹木の多い都市のせいとか美しく、わけても

大きく白いしゃれた建物が見えたが、これは元マッカーサー司令部で現在は南方総軍司令部であることがわかった。その夜は美麗な夜景を眺めて寝についた。

楽しい休日も夢のように終わって、疲労いまだ癒えやらぬ船団は、五月一日、再び錨を上げた。出帆後「当初は目的地が比島南部のミンダナオ島であったが、西ニューギニアのハルマヘラ島に変更になった」とのことであった。もうどこでもいいから早く上陸できれば、と思ったのは私だけではあるまい。

三日ほどはフィリピン群島の数ある島の近くを、あるいは、ある時はその間をジグザグと進んだが、右（西方）に突然進路が変わった。ボルネオにでも向かうのかとも思えたが、これは敵に対する欺瞞作戦であったのか、間もなく進路を一八〇度転換してセレベス海へと向かった。この夜、対潜監視員を命ぜられた私は船先の右舷にいた。砕ける波は夜光虫を飛ばして実に美麗であった。

このころ、本船は遠隔操作の舵が故障し、電話連絡による手動で航行せざるを得なかった。このため、ま

たまた陸兵が労力を提供することとなった。船長の「取舵六十五度」「アラアラ反対に行った」などの声が初めのうちは聞こえることもあった。五月六日、船艙日直将校は第二船艙の日直下士官十数人を集めて注意した。「本船団は明七日午後、目的地に到着の予定、各隊入り混じっての輸送であるから、携行品の整理に努め兵器などの紛失なきように。百里の旅は九十九里を以て半ばとするの教えのとおり不測の事態にも対応できるように、物心両面の準備に遺憾なきを期せねばならない」と。

この日は早番であったのか、まだ十時過ぎなのに昼食が出た。一休みして、生理現象を催した私は日直勤務の印である赤禪の腕章をつけ、巡察のふりをしてデッキの下にある船員用の土官便所で用を足す。終わって救命胴衣を着けようとすると非常ラッパである。どうせ演習だろうが、今日は勤務であると丸窓から表を見る。兵の顔を見ると対応動作がいつもと違う。さてはと思つた瞬間「ドスン」物凄い衝撃がきて、「轟沈」「死」の文字が頭をよぎった。開かないドアを軍靴で

蹴破つて左舷に出た。

二〇度も傾いた船腹には、華嚴の滝のような水の固まりが降ってくる。デッキから出ようとしたが足がすくむ。皆は鉄帽や防毒面、毛布などを手当り次第頭に掛けて伏せている。十四時二分であつたとか。これはすぐに終わったが、僚船はと見ると反自船とも西に向かつて算を乱して逃げている。これは情けないと思つて右を見れば、二隻の船が淡い煙を吐いては船尾から、あるいは船首から滑るように三〇度くらい海底に吸い込まれていく。

わが船はと見ると、デッキはその両翼にある張り出しを飛ばされ、急造の便所などもちろんない。ウインチに挟まれて助けを求める者、鉄塊に打たれて頭から血を流して絶命している者、二の腕から先が吹き飛んで風胴にへばりついている者などなど。さらには直撃を受けた第二船艙では、真っ黒な石炭水の中に戦死した人と馬とが浮かび、死にそこねた馬は悲しげに泳いでいる。これこそ修羅地獄とでもいうべきであつた。ここで今一発を食らえば轟沈すること必定である。

船長は躍起になって「飛び込め、飛び込め」というが命令がない。やがて「輸送指揮官は軍旗を奉じてすでに退船済み」と知らされて、日直司令の命令で一斉に退船を始めた。ロープを握って、一段一段と降り、だいぶ降りたのでこの辺でよかろうと手を放したら水中深くドボンと落ちた。なるほど船は大きいもんだと再確認した。

釜の中でふけた芋のようになっていた私達にとって、大洋の水は本当に気持ちがいい。ああこれで助かったと思った。救命胴衣をつけ、二メートルもの竹筒に腕を掛けているので、さらに快適である。周りの人もみんなにこにこである。コバルトブルーの静かな海は百尋の海底に手も届かんばかりで、その味は辛くて苦い。ふと近隣を見て気付き赤禰を足に垂らす。鱧なまこ除けであるという。潮流のなせる業かバラバラの人はいつしか一つの塊となった。五〜六時間もたったか、陽ははや西に傾いている。

敵艦を警戒しながらの救助活動は一カ所でじっくりというわけにはいかず、軍艦一隻と小艇数隻ではなか

なかはかどらない。日はトップブリと暮れた。救助が途中で打ち切られるのではと一抹の不安が募る。元氣を出すために「君が代」をはじめ軍歌の合唱をするが、胸を圧迫されている水中でのことである上、疲労が重なり、南海の空にさびしく響くのみで、いつしかやんだ。何時間たったか、胴衣の浮力も次第に減じて、水はもう顎の辺りまできている。

電車に乗るように一巡して来た艦が、ちょうど自分の前で止まったので、投げられたロープと体中ドブドブの私とが引っ張りあう。甲板の低い駆逐艦ではあるが、上がるのには大変である。水中からも私の尻を押してくれる。甲板に上がった者は、例外なく吐き気を催す。そして後からの人のために綱引きに加わる。それから二十分程で救助は終わった。艦は直ちに発進した。風を切って進むので、水がやっと切れたが、せつかく温まりかけた体が再び冷えてきたので、みんなで物陰へと隠れた。

見るとわが「天津山丸」に火の手が上がっている。

これは船長達が引き返して沈没しない船に自ら放った

火なのである。ガソリンが、弾薬・弾丸が炸裂し、爆音とともに大きな火の玉となり、次から次へと冲天高く舞い上がっている。私達は右に、あるいは左にこの様を見ながら走った。結果を確認しているのであろう。夜は明けた。すでに「天津山丸」の姿はない。

突然艦は止まった。遭難者である。やや進んでさらに一人を救助した。精神力、体力ともに立派なものと感服したが、後から助けられた兵は手当てのかいもなく亡くなったとのことであった。

九時ごろ水兵さんが四角い食缶に入れた塩結びを一個ずつ配ってくれたが、一昼夜ぶりの食物のこととて、みんなでガツガツと食べた。

なおも進む駆逐艦の前方に島々が見えて、先着の船団がノンビリと碇泊していた。やれありがたや目的地に到着かと思っただが、ここは北セレベスの属島であって、私たちの到着を待っていたのであった。

それぞれの輸送船に分乗となり、わが木場部隊は「ブラジル丸」に移乗となった。この船は大変なオンボロ船で魚雷一発で吹き飛びそうな狎船に見えたが、

船員の話では船は古いほど縁起がいいとのことであった。さらに本船はくしくも私が入営の際、東京港から青島まで運んでくれた船で、その時の戦友が多数乗船しており、私の無事を喜んでくれた。一夜は明けて、ハルマヘラ島、ヘヤホールに碇を下ろした。

〔後記〕

同じ船団を組んだ雪兵団はさらに東進して西ニューギニアへ向かったという。

ハルマヘラ島へ着いた楓兵団は海軍陸戦隊などを率いて同島守備に任じた。特に連隊長二代戦死のモロタイ島戦線にあつては、終戦時全くの飢餓状態にあつたと言ふ。

私の属していた木場支隊はハルマヘラ島より「天津山丸」海没地点近くであるトラウド諸島に移ったが、これは米軍モロタイ基地から、フィリピン戦線のレイテ島への道すがらにあるため、毎朝一五〇機くらいの戦爆連合が通過し、午後には戦に疲れた敵機が編隊を解いて帰り、残った爆弾を全部トラウド島へ捨ててい

くのである。そのために終戦間近まで現地自活はできず、半年分の糧秣で、二年近くも食いつながざるを得なかった。これは一日一食にあたる。

さらには、食糧不足から、捕虜の米濠軍人飛行士五人を処断をせざるを得なかったのであるが、そのため、木場大佐以下、大隊長と中隊長四人、そのほか旅団参謀長が刑死したのである。英霊並びに処断した捕虜に対しても合掌。